

12.5 現場を見て災害をシミュレーションする

ハザードマップで自分の住んでいる近くに危険区域や警戒区域が示されていることがあると思います。あるいは、近くに危険渓流とか急傾斜地崩壊危険区域の看板などを見たことがあるかもしれません。しかし、その実態を知っていたり、見たりして、そこがなぜ指定されているのかを知る機会がないことが多いのです。昔と違って、山に入る機会がないこともあります。その状況を知っておくことは大変重要なことです。ぜひ、そのような危険区域や警戒区域について専門家の説明を求めていただきたいと思います。

例えば、土石流について、近くや背後の沢が何らかの指定を受けているところについての説明では、まずどのようにして土石流が発生するのか、これまでの履歴がないか、どこから土砂が生産されるのか、溪岸の状態とか植生に加えて水源涵養域などの説明がされるとと思います。その中では、土石流の前ブレや雨量のことが説明されます。実際に土石流がどのように発生するのかを現地でイメージすることで、避難のルートや避難所について、より適切な判断や選択ができるようになります。机上で、ハザードマップを眺めるだけでは十分ではありません。

水害にしても、実際の状況を再現することはできませんが、大雨の後に水たまりが出ていないか、内水氾濫が起きたらどのような光景になるのか、アンダーパスはないか、安全な避難ルートはどこか、どのタイミングで避難するのか、家に裏山があればどのような備えが必要か、など多くのことを現地を見て考えることはとても大事なことになります。水害は、これまでに様々な経験がありますので、地域の方とも情報の交換をしておく機会があると良いと思います。

災害では、何が、どこで起きやすいのかを知っておくことが大切なこととなります。そして、災害の種類によって避難の方法も避難する箇所も異なっていることがありますので、災害の性格というか特性を知っておくことで安全に避難できます。

例えば新しい住宅地などでは、古くから地元で暮らしている人がいないので、旧地形とか地域の伝承や災害の履歴に関する情報が多くないことがあります。地形や地質にかかわっている専門家に説明を受けて、地域の情報共有を皆で図っておくことは大変に重要なことです。

よく聞く話ですが、地域で災害に熱心な活動をしようとする、平時に乱を起こす人だといわれて敬遠され、災害に関心を高めようとしてもやりにくいことがあるそうです。自然災害は、この日本列島で暮らす限り、上手に共生していかなければなりませんし、気象が変化してきている中では、無関心では暮らせません。また、防災・減災では自助や共助は大変重要で、これらが充実していけば、公助自体も低コストになります。一番の高コストは行政任せということではないでしょうか。

現地を見る、現地で教わることは災害への関心を高めて地域のリスクを正しく理解することになり、地域や個人ができることを明確にします。ぜひとも危険区域が指定されている時には現場をフィールドワークしてほしいものです。